

言者ムハンマド（7/12）：マディナにおける新たな局面

:

明:この 事の 明: 新しい都市国家の建 に伴った挑 に して。

目:[事 言者ムハンマド彼の](#)

より: IslamReligion.com

ED6 Dec 2009

集日 21 Oct 2010

通常、言者ムハンマドの主な食事内容は、ナツメヤシのとミルクを混ぜた物粥、そうでなければにナツメヤシのと水だけでした。彼は度重なるえに耐え忍び、には平らな石を腹部にき付けてその苦しさを和らげたこともありました。ある日一人の女性が、言者が必要としていた外衣を彼に与しました。しかし同日の、ある者が埋葬する体を包むための布を求めて来た、彼はそれを即座に施してしまいました。また彼は多少の蓄食料を所有する者から食事を提供されていましたが、彼は自分自身の口にそれをぶ前に、より必要としている者たちにそれを差し出すことを常としていました。年も52にし、体力が衰えていた言者は、神が彼に与えた々なの人々ので、真の宗教であるイスラムに基づいた国家の建に苦しみました。

卓越した外交手腕と人格のみ合わせによって、言者ムハンマドはマディナで立し合う派の和解に取りみました。彼のの教友たちが次々と移住して来る中、新参者の支援制度は非常に重要な要素を持ちました。‘移住者（ムハジルン）’と地元の改宗ムスリムである‘援助者（アンサル）’の束のために、彼は相互立の制度を制定します。それは、各‘援助者’たちが、‘移住者’の一人を自分の兄弟とし、相の利にまで渡るあらゆる状において、その者をの家族と同じいをさせるというものでした。かな例外を除き、‘移住者’たちは移住に伴い、全てのを失ったため、新しい兄弟たちにるしかなかったのです。援助者たちは、には住居、土地、といった形で彼らの半分のを

渡す程でした。これが信仰上の兄弟にする援助者たちの意であり、彼らはあらゆるを半分に分け、くじ引きで自分の配分を定めたのです。大半の場合、彼らは移住者たちに、彼らの内のより良い部分を呈したといわれています。

ある日突然、全くの他人を自分の家族に加えなければならなかった状にもならず、彼らのに何のも生しなかったとされているのは、‘奇’であると形容する感にられます。この同胞の束はあらゆる先祖元来の、肌の色、国籍など、その他名誉の基となされた々の要素を破しました。そして人々のに束をもたらす唯一のものが宗教となったのです。信仰心がここまで人をえ、はっきりと踐されたのは、史上他にをません。

しかしマッカから来たムスリムたちは、彼らの技能を忘れたわけではありませんでした。移住者の一人にし、彼の新しい同胞が言いました。‘哀れなお方よ、私に何か出来ることがあれば教えてください。私の家と蓄えもご自由にお使い下さい。’彼は答えました：‘慈深き友よ、市がある所を教えてください。ればそれで十分です。そこからは、自ずと道がけるでしょう。’承によればこの男は、チズとバタのを始め、まもなくその富から地の女性と婚する金の支払いが出来る程となり、やがて商に700のラクダを装出来るほどにまでなったといわれています。

そういった事は推されていましたが、同にそれを行う能力を有さず、また家族やがない者たちもいました。彼らは一日をモスクでの勉でごした、言者によってなる援助者たちの家に送られ、そこで夜をごしたのです。彼らは‘アハルツ＝サファ’として知られるようになりました。彼らの一部は言者自身の食卓でわれ、食料のないときには共同から大麦をいて食べました。

ヤスリブにおける治の元年、言者は彼の人々とマディナ及び近のユダヤ教徒たちとのに、相互にする正式な誓をび、彼らの国民としての平等な地位、完全な信教の自由、そして他者からの攻のには互いに守り合うことにおいて合意したのです。

しかし彼らにとっての言者はなる支配者であり、言者はアラブ人ではなくユダヤ教徒でなければならなかったのです。またユダヤ教徒たちは、アラブ人部族の抗争による

不安定な情 を利用して通商による大きな利益を上げていたため、それは不都合でもありませんでした。マディ ナとその近 における部族 の和平は、彼らにとって 威となるものだったのです。

同 に、マディ ナの住民の中には新参者を憎み、一 的に和平を我慢していた者たちもいました。彼らの首 者であるアブドッラ ブン ウバイイ ブン サル ルは、言者以前のヤスリブにおける事 上の首 であったため、言者の到来を心から憎 していました。彼は形式上はイスラ ムへの改宗を装っていましたが、その ‘信者たち’ の としてムスリムたちを切ったのです。

言者とムスリムたち、そしてヤスリブにおける新国家の 生に するこのような不 分子の存在により、ユダヤ教徒たちとマディ ナの ‘信者たち’ の同盟は必然的でした。彼らはマディ ナにおいて常に で策略を企て、ムスリムたちを し けていたのです。クルア ンではこの理由により、マディ ナ 示の章ではユダヤ教徒と 善信者たちが 繁に言及されています。

キブラ

この 点までは、エルサレムが礼 のキブラ（ムスリムが礼 を行なう方角）でした。ユダヤ教徒たちは、エルサレムがキブラとして ばれている事 はユダヤ教の教えが元にされておき、言者は彼らの教えを必要としていると思っ っていました。言者はキブラがカアバへと 更されることを望んでいました。そこはアブラハムにより地上で最初に かれた神の崇 の なのです。移住 2年目にして、言者はエルサレムからマッカのカアバへとキブラを 更することを命じる 示を受けました。アル＝バカラ章の全体は、このユダヤ教徒の争点に 付けられています。

最初の 征

治者としての 言者の第一の 念は、公共での崇 を 立し、国家の法を定めることでした。しかし、彼はクライシュ族が彼の宗教を ぼすと誓ったことを忘れていませんでした。

彼らは 言者のマディナへの移住の成功に激怒し、マッカに居残ったムスリムたちへの拷問を加えました。彼らの邪な策略はそれだけには留まりませんでした。彼らは同時に既述のアブドッラブンウバイイのようなマディナの多神教徒と秘密に同盟を結び、彼に言者の害を命じたのです。クライシュ族は、たびたびマディナのムスリムたちへ彼らの全を迫るメッセージを送りつけました。また多神教徒による策略画の情報は言者自身の耳にもが届き、彼の家の周には番人を配置しなければならない程でした。そして遂にこの、神はムスリムたちに武器を取り、不信仰者たちとうことを可されたのです。

13年に渡り、彼らは格な平和主義をいっていましたが、それから数回に渡って言者ムハンマド自身、または数人のマッカからの移住者の指によって小さな征が行なわれるようになり、マッカへとく路の察、そして他の部族との同盟などが模索されました。また他の征では、シリアからマッカへの途にある商を奇することによってクライシュ族への的打を狙い、マッカ、マディナ双方のムスリムにする攻を食い止めるのが目的でした。これらの征ではごく一部を除き、に行なわれたことはありませんでしたが、それによってムスリムたちは自分たちを被抑的象としてではなく、急成をける手い新力として、アラビア半における新しい地位をき上げたのです。

この事のウェブアドレス:

<https://www.islamreligion.com/index.php/jp/articles/175>

著作 2006-2015 断を禁じます。 2006-2023 IslamReligion.com. 断を禁じます。